

第25回北勢線の魅力を探る 「水の恵みに先人たちの偉業を慕う」

開催日：2015年10月12日（月祝）

参加者：156人（内子ども6人）

協力：持光寺、善了寺、大神社、了圓寺、西岸寺、ふるさといなべ市の語り部の会

麻生田駅から持光寺～生水マンボ～善了寺

晴天。麻生田駅前近藤代表の挨拶の後にスタートする。員弁川に架かる天王橋を渡り、大安町丹生川久下の持光寺でご住職から寺の由緒と大正図書館についてお話を聞いた。元は尾張国海西郡にあったと言われ、再々移転したが、明治8年(1875)に独立した。その時の住職である佐藤宗英師は学問にすぐれていた。息子の佐藤巖英師も学問にすぐれ大正2年(1913)に庫裏を開放して「大正図書館」と命名し、蒐集した蔵書4,000冊を公開して多くの人に読書の機会を与えた。丹生川久下の松宮周節(1787～1846)について説明を聞いた。彼は父の元で医学を学んで家業を継いだ。医業の傍ら伊勢国中を回って各地の地誌・歴史を記した『伊勢輯雑記』などを著した。なお『伊勢輯雑記』などの著書は大正図書館に寄託され、現在も当図書館に保存されている。



持光寺大正図書館



山北家マンボ

ついで山北家のマンボと生水（しょうず）マンボを見学。昭和54年(1979)まで同家に住んでみえた北勢線の魅力を探る会のスタッフ、山北昌克さんの話によると、夏場はスイカなどを冷やしたりして、近所の人も利用していた。中は夏涼しく、冬は暖かかったので子どもの頃は中に入って友達と遊んだそうだ。冬は水が涸れていた。

山北家を出て旧丹生川村の中心地を通り、「おかげ参り旅立ちの地」を経て、善了寺に着いた。古城主野田丸右京の菩提寺と伝え、本堂は明治41年の再建、鐘楼は明治27年の建立である。



善了寺

片樋マンボ～大神社～日下家墓所～庄屋富永家・二井家墓所

次に片樋マンボに着く。平成12年(2000)に片樋地区まんぼ保存会が結成され、平成14年4月には片樋区によって「大安町文化遺産 片樋間風」と刻んだ石碑と案内解説板が設けられた。住民有志によって現在も維持管理がなされている。

次に大神社（おおみわのやしろ）を参拝。天平神護年間(765～767)、奈良県桜井市に鎮座する大神神社から勧請されたと伝わっており、『延喜式』内社である。大正と平成の2期にわ



片樋まんぼ

たって大規模な境内の整備が行われている。大神社の東側に代々宮司を務める日下家の墓所がある。

近くには庄屋富永家と二井家の墓所がある。片樋で庄屋を務めた富永太郎右衛門と二井藤吉郎はいずれも片樋マンボの築造と改修に大きく貢献した人物である。全部で 10 基の墓碑が並び、「まんぼと庄屋墓地」の解説板もある



大神社

教楽寺～了圓寺～西岸寺～いなべ市郷土資料館

次に教楽寺にたどり着く。教楽寺の十六面観音像は平安時代につくられ、恵心僧都の作といわれている。また、寺の周辺には「薬師」や「観音」、「弥勒」の地名もあり、教楽寺六字の名残とも伝えられている。次の了圓寺では本堂へ入り、簡単な説明を聞いた。その後、昼食となった。大安町にある 17 ヶ寺の内、この了圓寺だけ真宗大谷派の寺である。東正門の右に「元



十六面観音像



了圓寺

禄元年(1688)・庸瀨山了圓寺」と刻まれた石柱が立っている。

昼食後は、オプションの西岸寺・郷土資料館に行くコースと、このまま楚原駅に向かうコースに分かれて進んだ。

西岸寺は元亀元年(1570)に釈道岸によって開基。9代目和尚、玄海は大きな功績を残された方で、和尚夫人は、桑名藩第 11 代藩主松平忠功の家老、奥平織右衛門の長女。桑名藩との繋がりも深く、桑名藩より信頼も厚く「藩札」「私札」と木版が保管されている。



西岸寺

すぐそばにある「いなべ市郷土資料館」に寄った。この建物は、大安町庁舎として昭和 44 年に完成した。その年の「中部建築賞」を受賞している。現在はいなべ市郷土資料館として活用されている。3 階には戦争に関する資料室があって、日清戦争から太平洋戦争までのたくさんの資料が並んでいる。



郷土資料館

員弁川第一頭首工～めがね橋・ねじり橋

次に三笠橋のやや下流にある員弁川第一頭首工を見学。農地灌漑用井堰と取水口である。

三笠橋を渡り、めがね橋、ねじり橋に向かう。ちょうど上りの電車が麻生田方面から来ていて、絶好のシャッターチャンスとなった。すぐに反対方面の電車が来るということで、ねじり橋に向かい写真を撮る。電車の時間にピッタリと合わせたような絶妙のタイミング。



員弁川第一頭首工

めがね橋とねじり橋はコンクリートブロック製の橋である。重要な土木遺産である。